

青樓畫之世界錦之裏

分四寸三 コ ヨ 紙 表
分一寸五 テ ヲ

寸 三 コ ヨ
分一寸四 テ ヲ 粹文本

まを挿ひる乃世家録せいか録りく

表うら白しろ序しよ



一日書肆しよし唐丸たうまわ末

て曰いふ例れい於お小冊せうさくの事こと

とあるやありやと

予よ卷まきて曰いふまがとあは

素癪すさく不道ふだう

念ねんする様やうと安やす法ぽう合あひふ

うけがひも一ひと執とく筆ふでと

所ところがと無なき其そのハ銭せん金かねと

よふ思おも索さく也なり蓋ひた妄ま作さく乃

茶表紙ちやうしも年とし々々筆ふで々々

穴あな相あひ似よて歳とし々々筆ふで々々

紙し向むか新あたらしかがたれは一ひとツ

と川がわと松のまつ々々々々々々挿さくの

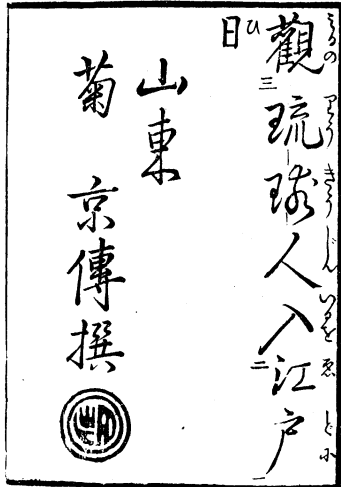
のをを書かきたるの景けいををあ

らと美みと々々々々々々々々ててああるる

事ことありし乃な小冊せうさく此こ奴やつはは一ひとツ

新織あたらふため其その備ま錦きん

乃な裏うら々々題だいとと而已のみ



天
木
三

青樓 (1) の世界錦之裏自序 (2) (3)

一日書肆葛唐丸來て曰。例の小冊の案じはありやなしやと。予答て曰。まだあるく
 と。素癡な道念みる様に。安請合にうけがひて。ト執筆た所が。無ものは錢金とよい
 思案也。蓋妄作の茶表紙も。年々歳々穴相似て。歳々年々趣向新しからざれば、一ツ
 ぐつと捨ててみた。青樓の (1) の世界。夜の景色の花美とは。うつて變た案じの小冊。此
 奴は一ツ新織ならめと。其儘錦の裏と題す而已。

山東 菊 京傳撰 (4)

僧門至日



亭午之圖



附言

宋玉、好色賦を作して、
 戒紫氏、五十四冊、
 色欲を戒むるは、
 佛の譬諭方
 法と云ふ、淫蕩と云ふは、
 必す戒むるべき事、
 喜怒哀樂、
 微意あり、
 誦く諭す、
 戒る、
 則、
 教訓の二字、
 視人、
 宣家也

附言

宋玉は好色の賦を作りて色情を戒。紫氏は五十
 四帖に艶言を述べて色欲を戒む。是皆佛の譬諭方
 便と異なるをなし。予屢安の著述をなし。淫蕩
 を傳ふるに似たれども、必其戒を忘れず。喜怒
 哀樂の人情を述べて勸善懲惡の微意あり。邇
 く諭をとらば幼童を賺し戒るに。飮を以し。灸
 を以てするがごとし。則、飮は譬諭方便なり。則、灸
 は仁義五常なり。然れば此小冊に教訓の二字を冠
 しむること。所以なきといふべからざる乎。視人
 宣家也

青樓畫之世界錦之裏

山東京傳戯作

五更鳥 ガア~~~~~。 伎端 ボラウソ

紙砧の音コト~~~~。 商人

人の聲油あげ~~~~。 夫神靈矢

口渡道行の文句曰く ならふことなら

夜の明ぬ國に生れていつまでもと云々

是戀くの常情をよくいひかなへし妙言

なり。浦島が珠匣硝子の腕皿にはあら

ねど。明けてくやしききぬの。其

情あいば昔から。詩哥連誦淨瑠璃小唄

談儀説法夜講釋川施飯鬼でなければ。

座船へ来たとなき老仁。日連記でなけ

れば操芝居も見た事なき姥にいたるま

で。唐の和の千万人。口のすくなる程

いひつくして。今さらいふも愚痴なれ

ど。花炮家と婿家とは。昼といふもの

世の中に。絶てしなくもすむものなり。

愛 昔後一条御宇。攝州河邊郡神崎
の之廊。吉田屋喜左衛門云有妓家

それが二階の朝景色。杯盤狼籍廊下に
は懸盤に杯臺。茶臺のうへに茶碗を
のせ。さも居合ぬきの踏臺のぞく傍
には輪切の乳柑の皮の下に杉箸の折二
本。月に霞はどでこんすといふかたち
にすてゝ有。番くすは物日の浴室の三
方のぞく重ね。上草履は女護の嶋の入
口にひとしくならべ。小便所の嘔吐ば
落花のぞくちり。假母室の火鉢は堂火
ほどに消のこり。梯の下には文をなら
べ。門に塩を盛。雑妓の鬢差逆に懸
り。丫鬟の前髪横にみだれ。長く寝
短く臥し。昨夜の西施は今朝の無塩。

鼻のうす痘瘡。首莖の疵あくるわびし
きかつらきの。かみの毛のうすきまで
あらはにみへ。お坐のさめたるその中
にも。此吉田屋のお職にて。今のおい
らん夕霧ときこへしは。神崎一の全盛
にて。本地から磨た面屋の木阴。夜光
珠の昼見ても。光りのうせぬすがたな
り。朝かへりの客を茶屋まで送てかへ
りしとみへ。夕きりヲ、つめた。トはこ
より振袖。天とね寒そうなりにて。あたまのし
新造。紙にてはえ。おいらんの中をりの胸ヲヤもふ
げた。自分のけたとさきて来る。ヲヤもふ
そふじがきたさふだ。いつそ切ふよ。
廊下にはねずのほん多くの。行列起介どん。ッレ
燈をならべ掃除してゐる。
足から血が出るよ。どふした。おざ臺
のもの、松の釘でふみぬきをいたしま
した。列ヲヤあふねへ。ト座敷へはいり。し
てありし。あかじね臭いさゆを一口のんでみ。コレそ
てこぼし。火ばちの中をかきかして。ち
らねさん。下におきが出来たらう。ち

つと持つてきな。〔それ〕アイ。ト下へ。〔何〕あたまはし次の間の戸だの戸。さぞ氣づまりでを四五寸あけて細きしぬ。さぞ氣づまりで

おざりんしやう。トいふ所へやりての扉するゆへびつくり戸棚の戸を

どなり来る。〔何〕でおいらん。お早ふござります。〔何〕は戸だに。身をよせかけてさらぬ体。見なんし。

いゝ天氣でござんすねへ。〔何〕何さ。曇つておりますもの。昨日はモウ大に

くたびれましたよ。〔何〕やち付。ホンニ堀の内さんは。賑かでおざんしたかへ。

〔何〕アイ納手ぬぐひは。すぐに懸させ

て參りましたよ。〔何〕ソリヤアもふおかた

じけなふおざんした。モシへ寸間みなん

し。夜舟さんの寐たなりを。〔何〕ホンニ

ねへ。トこなたをみれば番頭女郎型かやみぶと

わきにふりしんの。〔何〕同しく内袴の上へヒか

つたものでござります。〔何〕さきつから

わからぬ寢言をいつてゐるすはな。

〔何〕馬鹿らしいねへ。トいふ所へ〔何〕は火

○折から廊下はかまびすく。新だ。〔密〕静かにし

ち大ぜい客をつかまへてきたる。〔密〕静かにし

てくれ。げへぶんが悪い。留袖なべづる

氣がちがつたさふさ。てん／＼が悪い

とをしなんして。人の知つたそのやう

に。〔密〕きのほせがするはへ。ふりしん

うちから。冷へかたまりいしたは。

〔密〕かぜいむしだア。ぬしがはじめなん

したらう。ト口／＼にわめきて廊下を引てゆ

坊さんにしたら。どんなだらうノワ。

〔何〕でしう／＼だの坊さんに似てきな

すだらう。〔何〕どうかもう氣のせへか。

坊さんじみて來さしたよ。〔何〕ホンニ

ねへ。〔何〕で茶やもにくうござんす。こ

んちうのれんをはづしてきた時。〔何〕な

あんなに口ひろいとをいつてノッ。〔何〕

マア此町をとめてやりイすがいのサ。

〔何〕戀かせさん。竹村のめへ／＼ひきす

りをぬぎすてきたから。とつて來な

んしよ。むだ夕さんはどうしたの。〔何〕

あの子は。二町めの溝へふんごみんし

から。こつちのりやうけんけんの通りどにす

るまでは。ぶしつけが有あちやわるふお

さんす。ト是よりむつかしくなる。茶屋もいろ

此と安やすくて着きものぐらいいたみと見みへるなり。

光ひかりりにひかるやつに。板いたのろまろまいろになつた細ほそ

帯おびをしめ。目をこすりわほけたやうな面おもてなり。

重おも床とこつなじか。『つなアイ。』重おもいところ

へ来た。たばこを吸す付つてくりや。『つな

アイ。』トまだ此座このざ敷しきには火ひがななきゆへ。や重おもて、

モべらばうらしい。火ひがきへたは。

ト煙けむり管くだてた。茶屋ちや男おとこいそぎモシおいらんおいらんの蛙か

くか。女おんなつかはします。『重おもそんならち

つと待つてくだせへナ。コレこんたのと

この。いつもの瓜うりの香かほノ、はもうねへ

か。『いまたござります。上うげまましやう

か。』重おもそんならぬを書かく書かうち持もて来てく

だせへ。後ご生せいた。』現下には地を柿にして

筆ふでぶとにそめ出したるのうれんを。半はん分ぶんままき上うげ

てあり。こちらの牛うし蓋がいにはかぶるが。をちまちまに腰こし

をかけ。きんかんのほろづきを。もちあそびにしな

がら髪かみをいづつもらつてゐる。〇もつとも。かぶ

るの髪かみは男おとこのかみ。かみゆい吉平きちへいコレじつとし

ふ。ちつとしづかにしねへか。又またこち

山の宿しゆくからくる出入でいの香かほや。はんたいを持もてみな

らべ。そばにはうは料理番りやうりばんの團だん圓えんかるかるきんをはき立

て居ゐる。した料理番りやうりばんの團だん圓えんももある。大黒だいこくははらのき

は上うりはなには亭主ていしゆ番ばん團だん圓えん煙えん管かんのきまきまきしづし

てゐる。『さかなやコリヤおめへさん。い。鯨あじで

ござります。生なま糞ふでなくッちやア。こん

な丈たけ長ながはとれません。鹽しほ文ぶん助すけ。すいもの

香かほはそれでい。か。『いハイ此この生せい貝かいはみ

んな女おんな貝かいたノウ。こいつア、地ち鮮せんだ。

『さかない、魚いしでござります。』團だん且じ那なさ

へるつげの櫛くしをちよんとおつこちそふにさしてゐる。これはこの二階の新そう頭かぶにて。よほどさばくかたなり。しかし年としのあくも近ちかければ、骨ほねのすて所にまごつかぬやうになつた。といふたき風かぜの女郎ぢやうらうなり。ふり袖うでそでの玉たま柄がらあひひろうどの油あぶらの襟えり巾きんのやうなぬのこ細こ帯おび。ゑりはまつくろ。白粉おしろい所ところく雪ゆきのまへのこりたるがごとし。

此所の二人がすがたさきも女むすめらうの

よふね 仰うやうや

ふべみへなんだ哥うたがるたが。夜着よるぎのそでからでんしたよ。㊶それみなんし。㊷おめへかたアきり／＼湯ゆへはいつて来て。床とこの間まやれんじをふきなよ。何もかもごみだらけになつて居ゐるは。いつでもあすこらが。くさらしいヨ。トいひながら。しかみの放はなのかたまりを拾ひろい出し。文ぶんがらを引ひきき。火ひばちのふちをふいて居ゐる所ところへ。かふるかふる。㊸雪ゆきのや。湯ゆにだれが居ゐる。みてきや。㊹今いま見てめへりイしたが。そとの人はだれもおりイせん。㊺おい

らんお出でなんせんかへ。㊻わたしはもちつとして參まゐじやう。ちつと今考いまかんがへて居ゐるとがござんす。㊼コレあしかのさん。わつちが湯ゆへいつて来るうち。おいらん臍へそも。わつちか臍へそもしておこ

かき付かきつけ 事ことの前まへ けは前まへ 十八手じゅうはちて にくわ につてこ づを

うし。お茶もわかつておかうし。それからアノ。まあ／＼それをきり／＼しなんしへ。雪ゆきのや。糠ぬかをいれて。浴衣ゆかたをもつてあゆびや。そしてからアノ。ほう／＼へいつて書付かきつけをとつて来こや。早くしやヨ。埒あちがあかね

へとさかねへヨ。おいらんがあんまり氣きをよくさつしやるから。みんみんなのたゝするくつてなるもんじやアねへ。トいひすて。㊽湯ゆへゆく時とき。つとの所ところへつげの櫛くしをさかきにごすは。髪かみの櫛くしをなすためなり。㊾そのあとへ小まもの屏びん。あたまへかんざしを二三本さんぽんさし。荷にをかたにかけてゐた。座敷ざしきをのぞきみて。赤あかい物ものあた

筭かみかみはこんた挽ひせやしたが。とんだ甲かみが、いゝから取とてをきなされせんか。㊿とほほしいが。今はちつと相談さうだんができ

持もてお出でなんし。㊽間物まげものアイ左様さやうなら。もしけふ中に賣うれすは。あしたもつて參まゐりましやう。おめへさんの氣きにいらねへとおつしやつた方のしのぎを。こつちへ遣つはさるとやすく上あられます。㊾ッリヤアどうともしんしやう。トいふ

㊿湯ゆからかわたしが此こちうのかうがい。㊽。うきが出でんした。㊽間物まげもの直ただして上あましやう。所ところへ持もつた女むすめ郎らう來きり。㊽間物まげもの畏おそりぞ早くおたのん申まをすよ。㊽間物まげもの畏おそりました。トいふはこいつゆふべ色いろ。男おとこと口説くちがして。をられた櫛くしの死し體たいとみへるなり。所ところへまふりしんり指さしの輪わはまだできんせんかへ。㊽間物まげものあすは出來きます。紋所もんじよは

とをひよくだつね。鹿静に云ておくんなんし。馬鹿らしい。一杯の樂みならん。

ちよつと浮里さんの所へいかねばならぬ。

居つづけが有よ。箱と磁瓶の八寸を出し。ちやずけ茶わんをならべる。火鉢にかゝりし土瓶の湯はチンクとわく。そばには湖月集の本のうへへ茶をのせてをき。煙草盆の引出しを引出してをき。たばこ入。

箱の鎖のをりる引出しに金があるから。二朱持ていつて。おあしをかつてきや。鍵は用だんすのひき出しにあるぞよ。

めく。こゝにやア鍵はおさりいせんよ。四ア、うそ／＼しめへ。手めへゆふべ入れたじやアねへか。

きのじやの書つけをみて。きに入たものへしるしをつけ。とりにやる。夜舟さん。

茶だんすにじやせん豆と。とうがらし

があつたらう。こゝへ出しな。四具のはしらを取にやつて。帆立貝で煮やうしやアおさんせんか。四とりにやりんしやう。四行平鍋はどふしたノ。四誰か。とふにわつてしまひんした。あしかのさん。けさの惣ざいはなんだ。

おし。たしか芋に油揚げでござりイす。四おそれるね。四あやまりイす。ト、食

のみにして。やうく朝おまんまを食べてしまひ。四は。わる長くうがひをつつかひ。たばこ二三ぶくの

を。ナぐに湯へゆく。かぶるは浴衣。四ふくや。ん。昨日の雛形はお氣に入りましたか。四いつそようおさりイす。あれにきめんしやう。四むくはやつぱり。四

ともむくにしておくんなんし。そしてこんどは禿物の丈をもちつと長くしておくんなんしへ。四か。しこまりました。四ア、モシク。へし。か

何ぞ見つくりつておくんなんし。コットそして。紫鹿子のゑりを一トかけよしておくんなんし。四か。しこまりました。所へ。一人來。八十兵衛さんへおいらんがちよつとお出なんしッサ。

四ぶく手めへはこの子だ。四軍井さんの所の子サ。トこぶくやはい。奥へゆく。四から上り。浴衣でみくをふき。聞なんしたかへ。ぐち里さんの客人は。つかまつて來なんしたそうだね。四さうでござりイすとさ。ちやつたアすみんすめへ。夜舟さん。身ごしれへをするやうに。何かを出しなんし。四あしかのさん。髪ゆひのお吉さんが。二階へきちやアいねへか。見てきてくんなんし。お針部屋もみてきなんしよ。もしまだ來さア。下々の中郎の人をたのんで呼にやつてくんなんし。中郎と曰は。内しやうの小づかひをする下男。四雪の事也。是も此里にかぎりたるとばなり。四雪のや。おはぐろをとつて來て。それから楓屋のかよひをもつていつて。板を

本とゑりつけとくこと。すきと。黒もつてへを取てきや。ついでにわる紙と。煙草もつてきや。夜舟さん。筆楊子をだしな。トいひつける。ふでやうじ

〔白田〕は因と師が鏡をならべくしたと。はんざうなど取揃へる。ほとなく。因はおほぐろを買つてきて。火ばちへのせてをく。〔例〕はんざうを膝のうへへのせ。まづ作やうじを火ばちのじやう

の中にてかきまはし。鏡にむかひ。かねをつける。○むかふ座敷には。床の間のうにさかづきを下めてしぼつてのせてある。これまぢ人の顔なるべし。とめ袖ゆしんかんざして火人の火をはきみ。火ばちへ入れな。〔因〕モヘンどうしてやりんしやう

ねへ。腹がたつて口惜くつてはりさけいす。おい。〔因〕きよせ。本によちたが。心ながら。居。それだつてもおめへ。手しやうもみねへ事が。何といはれるものか。

胸でおさめてゐて氣をつけなんしな。〔因〕何でもわつちが推量にちがひおざんせん。ゆふべのやうすがさふでおざりいすもの。トいふは若かほかの女郎とのいふ事

ふりしん。總高梁へいつてかへり。ふり袖をはたきながら来り。〔因〕がのんでおいた煙管のまださめぬやけ煙管のうへへう。〔因〕川ア、アツ、ノ、〔因〕つかりト手をつき。〔因〕わたくしは月

そつつかし子だヨ。〔因〕わたくしは月水虫がかぶつてなりイせん。モシへ今身のうへを見てもらいんしたがね。わるい星にあつておりイツサ。どふしやうノウ。いつそ苦勞だよ。〔因〕おめへ。か

さんがさつき逢ひにきたじやアねへか。〔因〕もふ歸りんした。〔因〕は書て居る所へまはしり。〔因〕青。お茶を一ツくださりまし。ト茶をくみ。兩の手をかけてもち。茶碗で手

く。いめへまし。中の町へいつて来たが。さつはかけがよらねへ。これじやア此ものめへは蜜柑でこせへた猿をみるやうに。首でもくらにやア

ならねへ。かけびまのでもたも恰好のわりもんだ。〔因〕みんなさう申したつけ。〔因〕人の氣も知らねへしやれるよ。なんばしやれても。また焼場の道

で。いきものはとをらねへ。おれが水あげをしてやらうといふに。〔因〕おのこはの指をなしたか。むしがいは。でつけながら。〔因〕おのこは

〔因〕何むしがい。なまびのむしがい。が聞てあきれらア。〔因〕わりイ酒だ。よつたら供部屋へいつて寝さつせへナ。

〔因〕げび川さん。ふうじ紙をもつて来てくん。そしてたんずの金物もちつと磨てくんなんしヨ。〔因〕ホシちつとみかきなせへ。賣薬店と女郎衆のさしきは。箆筒が光らねへとしんこうがうす

い。〔因〕さう吉ッどん。男の手でなくつちやア。悪イことがあるから。のちにぬの上書一つしてくだせへ。そして田ま

ちへいくものがあるなら。知らせてくだせへ。治丹坊の三百丸をかつてもらひてへ。〔因〕大かただれぞめへりましやう。ト行。〔因〕わつちや鈴郎さんのとけへ。淋病の薬をこせへてやりてへが。

けふはまにあいせん。淋病リンビョウのくすりを手裏しゅりに

二かいてもよくするとなり。予さるおいらにし

り此療法を傳る。あまりたわけなれば、この上うへに

す。○黄蓮ワウレン。甘艸カンサウ。丁香トウキョウ。山梔子サンシ。隈笹クマササ。

燈心トウシン。梅干黒燒ウメノボロクロ。阿膠アコウ。松子マツノイ。

三ツシ 以上十味等分ニ合煎シ用ユ。三ツ

黒ヤキ。葎ワレシそりやアそると。けふは幾

ひなり。日だのウ。葎ワレシいつかでおざんすか。伊イびわ

つちも知りイしなイ。折マから表おもてにはいろく

のよびこゑ。▲さんばさう。なんさん

きこへる。▲鏡磨カガミ。▲さくら草サクラクサ。

あやつり。▲針カガミがね。伊イモシへあ

れ。はりがね。が来きいたから。十

二目でおざんしやう。ヲヤこもさうが

きたよ。花哥ハナカさんごらうじいし。ちよ

つと立たばなこもさうざんす。葎ワレシどれ。

ト立てみるうちにはや。しもの方かたへゆきさするゆ

へ。そばにある巻見まきみとつておもしろ子こへうつし

て。みたる所ところ中ちゆう座ざ。たのまれましたが。

まし。ト勸化帳クワンカチャウを葎ワレシいくらほどやるのだ

よ。中ちゆう一トすじばかりおつきなさりま

し。葎ワレシワ、今いまださしておかう。ト云所ト云所へ

中ちゆう座ざげび川カハさん。こつちの御座數ござすうに皿ざら

が一ツ来ておりやしやう。見ておくん

なせへ。伊イびおざりいせん。中ちゆう座ざおめへ

がたはめへよう。そんな事をいくなさ

る。此こちうもこつちに平ひらの蓋たががござり

やした。わたしが預あづかりだから。なく

なつちやア迷惑めいわくでござりやす。馬鹿ばから

しい。ト小言こごんをいひ伊イびしつたかしらね

へは。とはぐらかす折まふし。廊下らうかにてざし

うはき木き。すこし心こころわるいとみへ。白しろねりの針はり巻まき。

糸いとにみ。うはコレあのあきんどやへい

つて。すどの香箱かうせうとの。下したモの木薬屋きやくやへ

いつて。血ちゆうどめと銀箔ぎんぱくをかつてきや。

そしてかへりにお針部はりべやで。綿わたをちつ

ともらつてきや。ちつと氣きをきかせや

ヨ。トこいつ晚ばんの支度しどとみへるなり。折まからあらひ

はりやはみのはから來きり。かし本ほんやはなくした

本ほんをせがみ。茶ちやわんばち解とは代しろものをみせ。あつ

かひは所書しよしょをうけとり。炭屋たんやはすみのはねてやけど

ところへもはや。ゆばん 湯ゆをしまひます

トふいへ。こなたの刃やきり。が座敷ざしき

ゆひ園ゆひ來きり。かみをいふ。園ゆひはか付か付つだ。おまの

唐から特とく選せんをよみながら。いせて居ゐる。大道直如だうだう

髮かみ春はる日にち佳よし氣き多た。ヲヤばからしい。此こ子こ

ト此うち圓たばこつけて圓にやる。四雪野や。あぶら手ゆへ紙でもちそへてのむ。

これをこぼしてきや。トはんぞうをつき出

は。おはぐるの嘴が八ぶんめほどあつて。まん紙に紅のつばきがふたちよばあり。わる紙とみす紙のく

づ。ふさが五ツ六ツあり。正摺子には小そでかけて

ほしてあり。所く紅のつきたるさらしの手ぬぐひ

のあらひこ臭きやつもほしてあり。○ほどなく髪も

ゆひしまひ。圓は外へゆき。圓は手水にゆき。あと

には函ひとり火鉢のまへにしよんぼりと。燃にかほ

牛ぶん埋めて。もの案じ姿にしてゐる。杉ばしを火鉢

にしたやつ。燃へしきりて。△茶屋へあたり

けぶる。此とき中の間の。△茶屋へあたり

けたんと。茶屋へ来。モシおいらん。晝狐さ

す所へ。○茶屋へ来。モシおいらん。晝狐さ

んが。お出なされましたよ。夕ホンニが今

じささまいくから。マア雪野を先へつれ

ていつてくだせへ。男ハイおはやうお

出なされまし。トイひす。四来る。夕モシへ。

四かてくわへて馬鹿らしいねへ。夕

どうしんしやうねへ。四わたくしがむ

ねにおざんすから。氣づかひせずとい

だして上ケまうしな。夕着物きかへる。○

上着は白な。こに紫のふきまおとしの源氏雲の中

に。四季の草花を極彩色の華仕上げ。もん所は藤の

丸むらさきのよりいにてぬひ。むくは緋殿子のど

うにへり。は藍色のむち八丈に。おなじ模様をいろ糸

にてすがぬひ。こは茶殿子に緋縮子のうちをつけし

しごきをしめ。も姿見にむかつてまもんをなました

所は。どんなこけな判人にくみせ。夕ゆきのや。

も七十五奴とみへるおいらん也。夕

となりの浮里さんの所に。居つづけが

あるじやアねへか。圓おざりイす。夕

おれがさふいふとつて。おめへの所の

子どもをかして。銚子を一つけへさし

ておくんなんしといつてきや。モシへお

たのん申すにへ。四氣づかひなさり

イすな。夕必ずへ。もつて来る。圓は茶碗

でぐつと一ツのみ。其勢。亭主左衛門。ばに。かん

はん板を本帳。うつしてゐる。○かんばん板といひ

は。女郎のうつた敷をかりに控へてをく。ぬり札の

とな。三分の印は三分二朱は一△これ也。夕

旦那さん。ゆふべはお有難ふおざりイ

した。圓好だときいたから。持たして

やつた。けふは何か店の衆の出番か。夕

イ、へ萍屋の客衆でおざりイす。圓アウ

ちよつと後をむいてみせな。マ、でへぶ

髪みづかみの風かぜが人がらがよくなつた。サアく

客人がまつてゐやう。早くいきな。夕

つてまいりイしやう。トしんを同くして。還

を見をくり。夕霧も頃日は。ひれがでへぶ

ついたノウ。女屋左やうサ。だんノ、よ

くなります。扱臺所のけしきは料理番のしこみ

の最中。かまぼこをたく。音。井

戸の車のまはる音。どんぶりのわれた音。米をつく

音かしましく。かふるは大ぜい長はんたいをとりに

いて。茶碗をくひ。火入をもつて来るふりそでしん

さうあれば。茶のきらしするひつこみかぶるあり。

庭には臺のもの。花をもとみ。かたへには酒だ

めの口を立るあり。いきざげのほひはなまつらぬ

き。湯氣はきりのふかきである男。酒狂。三河嶋の

湯へお出なすつたか。圓此間めへりや

した。酒おへつけへは。還ゆふべ茶屋

た。「突出しの白靴ものをとりたて」といふ句をしたが。どうだらうね。酒ウ、

句づくりがおもしろい。こいつアいきやしやう。トはなしの所へ病氣で頼のものとあづけてをくとみへる女郎の

ちつともいゝかの。和やとかくどうへんでござりまして。壱ツリヤアこまつたもんだ。早くよくしてへもんだのう。

おやハイ。壱マア飯でもくつていかつせへ。折からの暖物の内へさま。道心南無薩婆唯

哆伽多脚盧積帝唵三摩囉三摩囉吽。壱あの子や。そこへ進せろ。ト一文なげ出へ

こつじき 四ツ竹 「すまふヲ、とりイ、にイ、てしらふぢイ、げんウ、だアチヨ

コチヨ。ちう人 狂をひきてうらうけら。陰どろ、トのせを、とけ、れ、ま、ん

な、つ、らん。壱ア、うるせへ。所へ。ちう月花さんのかぶろがござりません。どうぞひととお貸なすつてくださ

りまし。女房 このちう隣からかりた子は どうしたの。ちうひつで歸しました。

女こなたの知つた所に。やとふかふろは あるめへかの。ちうきうに心あたり

がござりません。壱どふでけふの間に はあふまい。トみせの。かぶる貸場や、イ人

ウ引ノ。五色の糸とやうじを持つてき さつせへ。トいふは。このか神へ願又二かいに

はおくの。女房 澤邊やアノ。かぶる。アイ朱と百のたばこ箱を紙で包んで。その二

でいはへてもらつてきや。又大神樂をみていめへよ。こいつ三兩ぐらものと花

うちか中をふいて。ふりしん ゆふべの三みせん番はだれたノウ。撥がみへねへとつて

こし元衆がござとをいふよ。所へ。尾がわりいとつて。すぐにけへりイしたよ。ヲ、せつねへ。回客帳をつけてそり

やアよかつたねへ。今まで水戸尻の鏡におりイしすよ。トこゑを、モシ晩に

はかへつて人めが多くなりんすから。きうに癪のおこつた顔で。本問へは

いつておやすみなんし。女さうしてもようざんしやうかねへ。回わたくしが

いゝように計ひんす。ト人をうかひ。かし色男を出し。とろくしな玉をつかひをほせて。屏風の中へ入る。オそもく。此いろ男といつば。

ふち屋のひとりむすこ。此いろ男といつば。とあひぼれの。それが強じて不首尾となり。かんだらの身とならのはや。このてかしのうら店に。

女房が情にてかきまひをきしが。ゆふべ人めをうかいて。二階へ上ゲ。戸だなへかくせし。折わるく出そびれて。けふ一日しのばせをきたるなり。

屏風門 屏風のうちへはいのひやうし。筆のかさをひつしやりふんでびつくりせしも。よねにきず持人心。小ご。きぞたいいくつしなんした

でおざりイしやう。わたくしが自身にしては目にたちんすから。いひ付てはおきんしたが。ひもじうはおざんせんんだかへ。伊イヤ川たけがおりノ、氣

をつけてくれたから。ひもじくはなかつた。それに小便も氣をきかせて様へ蒲團の綿をむしつて入レ。音のせぬやうにしてくれたから。何から何まで困つたとはなかつた。夕トといふかほ。つ

ホンニおまへさんを。こういふはかなひ身にしたも。みんなわたくしが咎でおさんす。堪忍しておくんなんしへ。ト抱きつきたるきりくす。伊愚癡なとをいなくより外のとぞなき。

ふものだ。あまねく世の中の女郎買。余の澤山あるうちは。女郎の眞實はあらはれぬ。こういふ身になつた所を。み

ついでくれるがまことの心てい。ト此中の○○を○○の本ではひるみせ出て。申あふみ流かいはしづかになる。○折から此となりうき里が次の間には。新造直内也。西には。夕吉哥がるたをとつてゐる。夕その心はとゝいても。とゞきん

せんは。わたくしが願ひ。人目があるから人なみに笑ひ顔もしてゐんすが。お前さんの事を思ひ出します。いつそ死たくなりイす。一隣。五と三條院。こゝろ

にもあらでうき世にながらへば。みやこ戀しかるべき夜半の月かな。なにはアツトこゝにおざりイした。みやこちらさぬ

やうにおとんなんしへ。五と和泉式部あらざらん此世の外の思ひでに。伊今一たび勘當のわびもすみ。此二階へもはれて来てあはるゝやうになりたいものじや。五ホンニまいはんあはれんした時は。澤さんさうにおもひつしたが。此頃は。此やうなはかない事さへ。大てい的心遣ひじやおさんせん。伊さうさのう。

五どうしとみし世ぞ今は戀しき。みやこたしかこゝらにおざりイしたよ。五どそこにある。取ておくんなんし。藤原義孝君がためをしからざりし命さへ。夕思ひなをして。たまさかにお目にかゝりイすを。樂みにながらへておりんす。伊ハテしんで花賀が。夕咲もしんすめへ。伊命あつての物だねサ。なにはながくもかなと思ひけるかな。五とコレまんがちに

しなんすなへ。夕とは思ひすが。また丸で八年といふねんなれば。みやこいかに久しきものとかはしる。夕もしそれ迄にひよつとマア。五と右近。わすらるゝ身をばおもはずちかひてし。夕それを思ふとしんかなしくなりんす。伊ハテ。たとへ此うへどのやうに。なには身をつくしてもあはんとぞ思ふ。夕そりやほんでおさんすかへ。伊これさ聲が。五とたかしのはまのあたまみは。みやこ

ところへやり手のおよく。やうすは残らずみとどけた。と聲かけて屏風引あけ。頃うちあやしとおもふた。けさ程ちらと見つけてをいて。戸棚のうちとぼけた顔で氣をつけたが。あんにたがはず此しだら。わたしがかほをふみつけて。なんて役儀がたつものぞ。此とをり内證へゆき。だんなさんに申す。これ若衆や。此男めを引すり出

しなんすなへ。夕とは思ひすが。また丸で八年といふねんなれば。みやこいかに久しきものとかはしる。夕もしそれ迄にひよつとマア。五と右近。わすらるゝ身をばおもはずちかひてし。夕それを思ふとしんかなしくなりんす。伊ハテ。たとへ此うへどのやうに。なには身をつくしてもあはんとぞ思ふ。夕そりやほんでおさんすかへ。伊これさ聲が。五とたかしのはまのあたまみは。みやこ

したがよいわいのとわめくを聞つけ。
 わかい者われも／＼とかけ來り。にぎ
 りこぶしの雨あられ。むざんや伊左衛
 門があたまの上によりかゝる。夕霧な
 みだもろともに。中をへだてて身をお
 します。伊左衛門が身をかこひ。是や
 むごらしい。どふぞいの。皆の衆また
 しやんせ。伊左衛門さんにとがはな
 い。この人さんをぶつならば。まづ
 わたしからさきへ。ぶちころしてしま
 はんせ。きゝいれなくば是こう。と
 そばにありあふ鏡臺の。かみそり箱
 に手をかくる。やり手はあはてをしと
 ぐめ。是夕霧さん。大事の代物。おま
 へにけがさせてなるものか。ともぎと
 る其間に大勢より。伊左衛門がたぶさ
 つかんで引出す。かゝる折から。おも
 ひかけなき次の間の長持のうちより
 も。ヤア／＼夕霧どの。心底みへたと十段
 目の。大星もどきに聲をかけ。ふたをし

あけ。ぬつと出たる一人の男。若いもの
 ぐき、腕つかんでねぢり上ゲ。今一人
 をば力にまかせてをし倒し。こちらも
 蹴る。あちらも蹴る。ける／＼と
 けちらかしてぞ立たるは。こゝちよく
 こそみへにける。やり手はそれとみる
 よりも。ヤアお前さんは浮里さんのお
 客人。いつの間にとふしてマア其中に。
 といふにもかまはず。此男伊左衛門が
 まへに手をつかへ。いまだ顔をおみ
 しりなきゆへ。御ふしんに思召まし
 やうが。わたくし事は京都の出店に居
 り。番頭を仕る算右衛門と申ものでご
 ざります。此度用事あつて此地へ出。
 大旦那におめにかゝり。うけ給れば。
 あなたさまは御かんどうとの事。これ
 はしたり。おわかい事なれば。一ツた
 んの御あやまちはしかたなし。御心底
 もなをしならば。御勘當のおわびも
 申。二ツには是なる夕霧殿に。さほど

まで御執心なさるゝも。是赤緋のむす
 びしならん。心さへたゞ
 しければ。遊女とて
 もくるしかるま
 じ。夕ざりと
 の、心底。
 虚か實をと
 つくりと。正し
 た上にて根引をし。目出度祝言させ申
 と。扱こそあとの月より隣さしきの浮
 りが客
 とな
 律義と
 いふか
 へ名を
 呼。入
 こみしが。
 猶も實否をたゞさんと。今日
 わざとみつゞけをし。先ほど茶屋に申



表之錦

シふくめ。かへりしていにもてなして。
人なき折をさいはいに。是なる長持に
身をしのび。屏風のうちのむつまじと
をきくとゞけ。夕ぎりどのゝまとの
心を見ぬいたうへは。今日中にてい主
吉田屋喜左衛門に逢ひ。身うけの埒を
あけ申さん。其手附金は則こゝにと。
くわい中よりさいふとり出し。伊左衛
門が手にわたす。うけ取て中をみれば。
綺の財布の一ばいし。是は錦のさい

ふだけ耳をそろへし五百兩。金にそへ
たる一ッ通あり。いふかすとひらきみ
れば。何ノ。其方儀。心ていなをりい
よしきこへは問。今日より勘當ゆるし
いものなり。と書しはたしかに親の手
跡。ア、かたじけなし。ありがたし。
と伊左衛門夕ぎりも。もろともに手を
あはせてふしおがむ。折からてう。前
前路日將。斜。

是より錦の表とへんず。夜の景色のは
なやかは。今まで多くあり來りの小冊
で御らうじろ。

後叙卿 夫熟大 門視は 實の如く 骨のうへを 精ふて花 郭の喜怒哀 哀樂迷へ 眼中西施 鼻中臭氣を 出すは 鼻中臭氣を いだす。注 有漏路より 無漏路へ 提燈。人間 一切の養生 身の用心の まじやう。 時寛政三年 辛亥春正月 京傳自跋 御 聞

後叙志野

夫熟大門視は實

鬼貫が句乃如く骸骨

郭の喜怒哀樂迷

眼中西施を出し

悟を鼻中臭氣成

有漏路より無漏路

へ送る茶屋一の提燈

人間一切乃念生

乃田心さしやい

ましや

皆寛政三年辛亥

春正月

京傳自跋

御 聞

御 聞

御 聞